

## 精神保健福祉援助実習生支援のあり方についての研究

益 満 孝 一\*

### 要 旨

本稿は精神保健福祉援助実習生の支援のあり方について論述した。実習生は配属実習中に様々な課題や悩みを抱える。まず、実習生の課題について、精神保健福祉援助実習、国家試験、就職活動、卒業研究論文などがあることを指摘した。次に、精神保健福祉援助実習の現状と課題について明らかにした。第3に、実習生の実習中の悩みについて整理した。最後に、この実習生の悩みや課題に対応する方策として、実習生支援のセーフティネットの構築について述べた。第1に、実習生のエンパワメントを活用する方策について述べた。この方策としては、携帯電話やメールなどを使った相談方法の多様化について述べた。他には、実習前にボランティア体験をすることで、実習ショックの軽減を図るとともに、利用者との関わりの調整について述べた。第2に、実習生支援のシステム化という観点で、実習報告会、実習連絡協議会などをシステム化することで、実習担当者の連携を深め、実習生の支援となることを指摘した。

キーワード：精神保健福祉援助実習，エンパワメント，実習生支援

### 1. はじめに

精神保健福祉援助実習は、1998年4月に施行された精神保健福祉士法の「精神保健福祉士」の受験資格取得のために指定された科目である。精神保健福祉援助実習では、精神障害者に対する差別や偏見の長い歴史と当事者としての個人的な迫害体験、さらには、当事者のもつ現実の認知問題など特殊性を理解すること、さらに精神障害者そのものに対する正しい理解が必要である。本稿では、精神保健福祉士法に基づく実習機関・施設について精神保健福祉施設と称する。

精神保健福祉士はジェネリック・ソーシャルワークを基盤として精神保健福祉の領域におけるスペシフィックソーシャルワーカーとしての活動が求められることから、精神保健福祉援助実習の特殊性と専門的教育として、学内外で連携のある充実した実習システムの構築が求められる。

本稿は、精神保健福祉援助実習における実習生支援のあり方について、著者の過去4年間の精神保健福祉担当の経験と、本学での3年間の精神保健福祉援助実習を踏まえながら、精神保健福祉士実習生の支援について知見を論述した。特に、実習生への実践的教育の在り方という意味で臨床教育の観点から知見を論述した。ここで言う臨床教育とは、講義による理念など知識伝達による教育ではなく、個々の実習生の自己実現を、個別に支援するだけでなく、集団力働を活用した支援についておこなう実践的教育のことを意味する。

### 2. 実習生の4つどもえ状況

精神保健福祉援助実習生は、第1に社会福祉援助技術現場実習Ⅱと精神保健福祉援助実習の実習、第2に卒業研究論文、第3に就職活動、第4に国家試験対策という4つどもの

\* 九州看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科

環境となる実習生が多い。次に4つどもえ状況について概観する。

まず、社会福祉援助技術現場実習Ⅱと精神保健福祉援助実習について見てみると、実習時間は通算で270時間（6週間）であり、1.5ヶ月となる。両実習を1学期に行く場合は、1学期が約3.5ヶ月であることから、実際上は講義の約半分は受講できないことになる。第2学期には、11月と2月に実習報告会があるので、実習生は報告書作成とその準備を行うなどの負担がある。

第2に卒業研究論文がある。卒業研究論文では、例えば「知的障害者」あるいは「児童福祉」、「高齢者福祉」など他の専門領域をテーマに書くことを希望する場合がある。この場合に、卒業研究論文の文献収集や整理などと、精神保健福祉援助実習の事前学習を並行に行えるかという問題がある。

実際に、精神保健福祉領域でこのことに該当する実習生に対しては、実習施設からは学生の実習事前準備の不足だけでなく、実習への取り組みの弱さや熱意の欠如が多々指摘される。

このような背景には、学生にとって資格取得の志向が強くあり、取れる資格は取得したい、あるいは保護者の意向からとれる資格は取得したいということもある。さらには、自分の興味や関心が絞れずに、精神保健福祉の資格取得についても履修条件を満たしているから何となく履修する学生もあとをたない現状がある。そこで、年度初めに、専門性を深めるという意識を十分に高める為に、精神保健福祉援助実習の履修にあたって、履修前に面接を行うことで、実習生の意識の喚起をはかった。さらに、実習生の実習動機などから、実習の履修を制限することで、実習生相互の団結力も極めて高くなっていることが観察される。

また、筆者は卒業研究論文のゼミ生には、精神保健福祉援助に関するテーマにするように指導しているが、実習施設の指導者からは高い評価を受けるとともに、その施設や関連施設での就職の内定となる実習生が多い。

第3に就職活動である。前述したように、第1学期の大半が実習となる場合、あるいは第2学期に精神保健福祉援助実習に行く場合も、その事前学習などもあり就職活動に専念できないということがある。実習を終えないと、自分が精神保健福祉士か、あるいは社会福祉士として向いているかを決めたいことがある。つまり、社会福祉施設、一般企業などにしても、精神保健福祉援助実習での自分の適応性を見てから決めたいと考えるようである。一方で、精神保健福祉援助実習に行かない友人たちが就職の内定をもらおうと焦りなどが生じて空回りする実習生も出てくる。

第4に社会福祉士と精神保健福祉士の両資格についての国家試験対策がある。精神保健福祉施設では、精神保健福祉士の資格取得が前提となる場合が多く、そのことで試験に合格しなければという精神的な圧力を感じるが、両国家資格の試験対策ということで、その学習量の負担も高くなる。

以上の実習生の4つどもえ状況について、心理あるいは身体的な負担について概観した。こうした長期間の精神的なストレスのなかで、実習中の心理的トラウマ、家族関係の問題、友人関係の問題などが誘因となり、精神的な混乱を引き起こす実習生がいる。特に秋頃あたりからの卒業研究論文の仕上げ時期となったにも関わらずに論文作成に取り組めない実習生の対応を迫られることがある。

このような状況を踏まえて、新学期当初のオリエンテーションの時期に、上の4つどもえ環境について情報を与え、各実習生が自分の年間計画を立てるように指導することは必

要不可欠である。さらに、実習生の4つどもえ状況については、実習担当教員と精神保健福祉関係教員が中心になり、卒業研究担当教員、社会福祉援助技術演習Ⅱの教員との間に相互に連絡をとり、精神保健福祉援助実習生の支援ができる体制作りをすることが必要である。

### 3. 精神保健福祉援助実習の現状と課題

精神保健福祉士の国家資格以前に行われていた精神保健福祉施設における実習は、各施設の実情と実習指導者の力量に負うところが大きかったといわれる。しかし、平成15年度に精神保健福祉士は6回目の国家試験となることから、精神保健福祉士の精神保健福祉援助実習は、その創生期から充実期の端にいたばかりと言えよう。

本学の精神保健福祉援助実習は15年度で3期生となる。過去の2回は、精神保健福祉士の国家試験では約5割の合格率であり、社会福祉士のダブル合格は約9割ということからも学生の学習意欲と専門職志向の意識が高いと言えよう。よって、精神保健福祉士の専門職養成という観点から実習生に対する実習システムの充実が必要不可欠である。

#### 3.1 社会福祉援助技術現場実習を踏まえた精神保健福祉援助実習

社会福祉援助技術現場実習と精神保健福祉援助実習については、次の表1の通りである。

表1 社会福祉援助技術現場実習と精神保健福祉援助実習

学年	時期	実 習 名	実習時間	備 考
3 年	1 学期	社会福祉援助技術現場実習Ⅰ-1	90時間 2 週間	法定実習
3 年	2 学期	社会福祉援助技術現場実習Ⅰ-2	90時間 2 週間	法定実習
4 年	1 学期	社会福祉援助技術現場実習Ⅱ	90時間 2 週間	
4 年	通年	精神保健福祉援助実習	180時間 4 週間	法定実習

3年次の社会福祉援助技術現場実習Ⅰの法定実習を踏まえて、4年次の1学期に社会福祉援助技術現場実習Ⅱが、応用実習の位置づけで行われている。その実習後に、精神保健福祉援助実習はお盆休みなどで実習指導者の少なくなる8月をおおむね除いて、5月連休明けから、12月初旬までの間に精神保健福祉施設で行うことになっている。

社会福祉援助技術現場実習は、2週間（90時間）単位で3年次に2回、4年次に1回という実習を行う。なお、社会福祉援助技術現場実習Ⅰ-1とⅠ-2が、社会福祉士の国家試験受験資格のための法定実習である。

精神保健福祉援助実習は、社会福祉援助技術現場実習Ⅰの法定実習（180時間）と社会福祉援助技術現場実習Ⅱの応用実習（90時間）を修了していることを前提として配属実習を実施している。いわゆる、ジェネリック・ソーシャルワークの実習から、スペシフィック・ソーシャルワークの実習という関連性を持たせている。

こうした形態によって、社会福祉援助技術現場実習での実習体験が生かせることで、配属実習による実習施設の共通点と相違点を体験的に学習することで、よりその質の高い実習となると思われる。以上からも、社会福祉援助技術現場実習を踏まえた精神保健福祉援助実習となっている。しかし、実習施設や精神保健福祉の利用者との間で、心理的な混乱をとなる実習生も散見される。

### 3.2 精神保健福祉援助実習の実施形態

精神保健福祉援助実習は社会福祉援助技術現場実習が90時間という2週間単位で行われていることを考慮して、次のような実施形態としている。

実習の実施形態は原則として、180時間（4週間）の集中型か、あるいは90時間（2週間）の分散型とした。

4週間の集中型とは同一施設に集中して4週間の実習を行うことである。90時間（2週間）の分散型とは、同一施設に、間隔をおいて2週間ずつ2回実習に行く場合と、異なる施設に2週間ずつ行くことである。ほとんどが後者の異なる施設に2週間ずつ行く場合が多い。

実習が180時間（4週間）の集中型か、あるいは90時間（2週間）の分散型によって、前者は実習生の心理的身体的負担が高く、実習指導者や利用者との関係も関係が濃くなる。この関係が良好に維持される場合は良いが、相性が合わない場合など関係が思わしくなくなった場合は、実習生は実習を維持することが困難となる。しかし、180時間の集中型の場合は、担当する利用者との信頼関係ができるだけでなく、利用者との関係が深まり、実習施設に就労することに対してほのかな自信をもつ場合もある。

利用者の事例研究を行うことを課題としているが、180時間の集中型でないと、時間的に難しいようである

### 3.3 精神保健福祉援助実習と実習生の環境

4年次に行われる精神保健福祉援助実習について実習生の環境、特に大学での学習環境の面から検討を行う。

精神保健福祉士の実習を希望する学生は、4年次の履修として次の科目がある。必修科目は、卒業研究論文、社会福祉援助技術現場

実習Ⅱ、社会福祉援助技術演習Ⅱの3科目である。精神保健福祉科目は、精神保健論、精神保健福祉援助技術各論、精神保健福祉援助演習、精神保健福祉援助実習の4科目である。他の科目の履修がある場合に、精神保健福祉援助実習の実習を認めがたいのは、次の理由によるところが大きい。社会福祉援助技術現場実習Ⅱと精神保健福祉援助実習が、いずれの実習も開講期間の実習であることを原則としていることから、実習期間が通算で6週間となる。これは講義を通年でも6コマ分を実習によって欠席することになることによる。さらに、実習事前訪問や就職活動などで講義を休むことがあることを考慮すると、履修が成り立たないからである。実習による欠席は本学では公欠扱いとなっているが、科目履修という観点では課題が残ることは言うまでもないところである。

さらに、必修である卒業研究論文の12月中旬までの作成、社会福祉士と精神保健福祉士の両資格についての国家試験対策がある。

## 4. 実習中に抱える実習生の悩みとその問題解決

実習生が実習中に抱える悩みについて、次の3つに分けて見てみる。

### 4.1 実習生自身の悩み

まずは、実習生自身についての悩みがある。

実習生は配属実習に対して漠然とした不安を持つ場合が多い。例えば、実習初期には精神保健福祉士の役割を自分がうまくできるか、あるいは適性があるだろうかという悩みがある。さらには、初めて会う人と人間関係をうまく作れるかどうか、あるいはうまく記録を書いているかなどの悩みがある。実習生が異年齢の利用者などとの人間関係に不安を持つ場合があるが、これは我が国の教育が

同年齢の一斉教育であり、地域社会での異年齢の世代交流が少ないことなどがあると思われる。

実習の初期は、初めての環境であることと、初対面の人との対人的な緊張感、さらにはうまく実習がやれるだろうかという不安が入り交じり、その精神的疲労は大変なもので、帰宅後はくたくたとなるであろう。こうした精神的に疲労した状況で、実習が無事に終わるかなど思い描いて、精神的な浮き沈みを体験する実習生も多いであろう。これまでに、社会福祉援助技術現場実習など実習体験があるにもかかわらず、精神保健福祉援助実習の特異性の為に、よく眠れない実習生も多い。この特異性は、自分が利用者としてどう関わればよいか、あるいは、利用者との心理的な距離をどうすればいいかなど、利用者との関係の持ち方によるものが少なくない。実習前のボランティアに行った実習生は、利用者との距離の取り方を調整できるようになる。

実習中期以降になると、実習生は配属実習先の自分が「本来の自分が出せない」、「普段の自分らしく振る舞えない」などの不全感によって苦しんでいる実習生もいる。いわゆる猫をかぶった状態から、自分の地が出せない状態である。この種の自分の悩みなどとそのほかの悩みが複合的に絡むと、精神的緊張、あるいは実習記録の負担から睡眠不足となる。特に実習記録は、一日の自分の実習をふりかえるという自分と対面することになる為を書けないという状況に追い込まれることが少なくない。さらには、実習期間の長さが拍車をかけて、精神的疲労と肉体的疲労も重なることで、下痢、嘔吐などの心身症状を伴った問題となる。

実習生のなかには、精神障害を抱える利用者に関わることで、自分自身の精神的問題、家族や親族などの問題が、意識化されて悩み

始める実習生がいる。あるいは自分と同じような境遇の利用者やその家族の人間関係に巻き込まれる実習生も見られる。

また、スタッフ会議や事例検討会に参加できた実習生は、自分の知らない患者の話題、わからない専門用語で話が展開すると、疎外感を感じるだけでなく、ぼつんとしている自分に対して実習意欲がないと思われるのではないかと不安を感じる。

#### 4.2 実習指導者や実習教員との間で抱える悩み

まず実習指導者との間に抱える悩みについてみてゆく。

実習中の悩みとしては、指導者とうまくやれるかということは実習生にとっては最大の課題である。このような悩みに予防的な対処としては、配属実習前に、実習生が実習指導者と顔見知りになり、実習指導者の氏名と顔がわかる機会があると、配属実習への不安と配属実習中の悩みが少なくなる。

また、配属実習先のスタッフ同士の人間関係が実習生に大きく影響を及ぼして、特に担当の実習指導者が、複数だと、どちらの指示や価値観で行動すればいいか混乱する場合がある。

実習指導者の指導に対して、実習生の反応が乏しい、あるいは何を考えているかわからないなどから、実習指導者が困惑すると、さらに実習生も実習指導者としてどう対応していいかわからなくなり、一人で悩みを抱えて、関係の悪循環が生じることが散見される。

実習生のなかには心因反応として、病院の医療相談室に入室すると涙が止まらない、あるいは実習指導者から指導を受けるときになると涙が止まらなくなるものもいる。あるいは、実習指導者は相性が合わない、あるいは自己表出がうまくできないなどから、実習巡

回教員と面談する場面になると、涙が止まらない実習生もいる。

実習指導者が熱心な指導が、実習生にとって、過去に経験したことのない厳しい指導と感じ、実習生がどう対応していいかわからずに萎縮して何も言えなくなることもある。

なかには、実習施設での就職採用試験として、厳しく指導される場合もある。実習指導教員から採用試験だと思ってやってみてはと伝えることが、実習生のやる気を出すことになり、無事採用となることがある。実習生と実習指導者とのトラブルは、危機であると同時に実習生にとって最高のチャンスになることも事実であることを忘れたくない。実際に、就職を考えた場合には、実習施設で採用される場合が多いので、実習生には就職活動という側面もあることを伝え、過去の卒業生の採用状況を伝えて指導すると、求人がでた場合には採用になるものが多い。

実習指導者にとっての実習生を受け入れる意義は、後継者を育成するためであり、実習指導者の多くは、多忙な日常業務のかたわら実習生を受けいれている。実習指導者は実習生の新鮮な視点からの何気ない質問や疑問から新たな意義を見だし、施設をより良くしたいという理由から実習生を積極的に受け入れる指導者も存在する。

また、実習指導者の中には、現場の厳しさを伝えるために叱咤激励の指導が行われることもある。この厳しく辛いと思える指導に、単に資格が欲しいからという自分本位の動機の実習生は、くじけてしまうであろう。

次に、実習教員との間で抱える悩みについて見てゆく。

実習生にとっては、実習教員との関係で、自分が評価されるといことを極度に意識し、萎縮につながる場合がある。

さらに、実習生は自分が悩みを持つことが実

習生として不適格であるとか、精神保健福祉士として適性がないという評価を受けるのではないかと思いこんで、自分の抱えた悩みを一人で背負ってしまう場合がある。

教員と実習生の関係も時代とともに横の関係になりつつあるが、教員が実習生に対して支援する配慮がないと、自分たちよりも権力があり、それに従うのが実習生であるという旧来の縦の関係となるであろう。旧来の縦の関係は、実習生を萎縮させかねない。実習生の立場に共感でき、気楽に悩みを相談できる教員がいるかどうか、実習生の実習の成否を決定する場合もある。

このような悩みに対処するためにも、実習教員は複数で行い、さらには、実習生が悩みを相談しやすい教員としては卒業研究論文や社会福祉援助技術演習、および精神保健福祉援助演習の担当教員があり、実習教員との交流を生かした実習生の支援が必要である。そのためには、精神保健福祉援助実習について、学科内の教員の理解を進めることが大事である。

#### 4.3 利用者との間で抱える悩み

実習生が利用者との間で抱える悩みでは、実習生が利用者との間での適切な心理的距離が取れずに悩む場合が多い。例えば、利用者から、携帯電話番号、メールアドレス、さらには住所などを聞かれたときに、「実習生だから答えていけない」と言われていると返事して、「それは私が精神障害者だからですか」と言われて、「そういうわけじゃなくて、勉強できていて、自分のことが精一杯だからです」と答えても何か判然としないで悩む場合がある。また、利用者に対して、差別感や偏見を持っている自分に気づくことで、落ち込む実習生もいる。あるいは、実習指導者から、利用者と話してといわれても、話せないことが

わかり、自分のコミュニケーション能力がないことを痛感する実習生もいる。

また、実習生の施設への行き帰りに、利用者に待ち合わせされることが、自分のプライベートな領域に入り込まれたという恐怖心を持つことになり、心理的に身動きできなくなり実習自体が難しくなることもある。

## 5. 実習生支援のセーフティネットの構築

前述したように、実習生は様々な状況と向き合いながら実習を行わなくてはならない。その状況を理解し、配属実習中の実習生の悩みに誰がどのように対応するかという点については、実習担当教員、実習巡回指導教員、実習施設現場の実習指導員による実習担当者がチームワークによって実習生を支援する必要があることは言うまでもない。特に、実習担当教員の連携による実習生の支援は必要不可欠で、実習生が実習担当者に相談できるようにすることが必要である。

次に、実習生支援のセーフティネットの構築について、エンパワーメントの活用による実習生支援、実習生支援のシステム化の2つの観点から論述する。

### 5.1 エンパワーメントの活用による実習生支援

まず、実習生が自分のもっている力を高めて精神保健福祉援助実習に取り組むことができるという観点から論述する。つまり、実習生のエンパワーメントによる実習生の支援を見てゆく。

#### 1. 相談方法の多様化による実習生支援

実習生は様々な困難に対処しながらも悩みを抱えて、慣れない環境で実習を無事に修了する必要がある。この時に、実習生が自分の抱えている困難な問題や悩みなどについての

問題解決や対処を相談できる相談方法が多様化することは重要である。つまり、相談方法として、携帯電話やメールを活用する。

実習生が悩みを持ったときにいつでも相談ができる体制作りが必要であり、特に、実習生が、相談しやすいように、最新の科学技術による様々なメディアを活用することが実習を支援に有効である。実習生が相談したいときに、携帯電話やメールを使って相談できることは、一人で悩んで自滅するのを防止する効果がある。

筆者の実習生に対する相談の経験からも、電話では相談しにくいことがらや相談しにくい時間帯でも、メールで相談に応じるようにしておくことで、早期に解決した事例が多々ある。また、携帯電話による相談を利用することにより、遠距離地の実習巡回前に起こったことに相談を受けて、実習生が心理的に立ち直るなどの事例は少なくない。こうした相談内容が実習生全員に関係することであれば、講義で情報提供することで、問題に即応的に対処することが可能である。特に配属実習先が大学から遠距離の場合には、実習担当者にいつでも相談できるということで実習生は心理的に安心感をもつことができる。悩みが問題化する前に、早期に対応することと実習生が実習中に困ったときに、相談の受け皿があることは安心して実習に赴くことになる。この相談方法の多様化は、実習生自身が自分を救済するために、自分自身から発信できることで、自分を救済できるという点が大きい。常に、自分が自分の味方になれるのである。

#### 2. 実習生と実習担当教員との信頼関係の構築

実習生と実習担当教員との間に配属実習前に信頼関係を作る必要がある。

困ったときに誰に相談するかという問題は、相談する側の立場に立たないとわからないものである。相談しやすい環境の作り方としては、例えば、教員がソーシャルワーク実践を得意とすれば、精神保健福祉援助実習の事前指導や精神保健福祉援助演習においてロールプレイを活用する方法がある。

教員と実習生とのロールプレイはスーパービジョンの基礎的關係となる。つまり、このロールプレイは、教員が共感的受容的態度による傾聴をすることで、受容体験によって自己開示をしやすくなる。これは、言うまでもなく実習生が教員に相談するというスーパービジョン体験の基礎的な関係といえる。さらに、実習生同士のロールプレイを行うことによって、実習生同士でも相互に支援するという関係が育成される。

### 3. ピアグループによる相互支援

ピアグループの育成による実習生の相互支援について見てみる。実習生の中には、実習中の悩みを友人などに相談しながら無事に実習を終える場合が多い。こうした背景を踏まえて、実習生のピアグループ育成による支援が必要である。

前述した携帯電話やメールによる相談は、実習生同士では頻繁に行われている。こうした関係はピアグループによる相互支援が育成されて初めて可能となる。

ピアグループの育成には、前述した精神保健福祉援助演習での人間関係作りによるグループニングを促進することが効果的である。

さらに、精神保健福祉援助実習報告会における相互の協力が相互の信頼関係を高め、その後、国家試験対策についてもグループで行う様子が見られる。

### 4. ボランティア体験による実習生のエンパワーメント

実習を成功させるコツは、早い時期から精神保健福祉施設でボランティアなどして、配属実習前に利用者との関わりを通して、実習生がエンパワーメントされることが大きい。

ボランティアは、利用者などとの対人関係も経験できるので、実習初期に生じやすい実習ショックが軽減できる。

実習ショックとは、実習生が過去の体験学習によって得たことや自分の価値観などを心理的に揺らす体験であり、実習生にはそのことがトラウマになる実習生も出てくる。実習によるトラウマは、実習後に自分の実習経験について極力触れないようにしたり、あるいは、精神保健福祉士への就労は向いていないと極端な言動をする場合もある。また、例えば精神科病院での実習がうまくいかないと、その反動形成として、精神科病院に強いこだわりをもって就職活動をする実習生もいる。これは精神保健福祉施設での就労で、そのトラウマを補償するという健全な心理機制であるという立場を筆者は取りたい。実習生の表情は無くなり、精神保健福祉関係の授業の欠席や遅刻などが目立つようになる。また、実習生によっては、激しい価値観の揺れを感じたり、利用者との人間関係のなかで心理的距離が適切に取れなかったり、自分が何もできないという無力感をもち、実習事後指導によって実習生の自己受容を図ることで、心理的な健康を取り戻す場合が多い。

この実習ショックを予防する方法について見てゆく。実習前にボランティアに行くことで、このようなショックを受けても、時間をかけて順応することができる。ボランティアであると、評価されることが無いことから、自分の対処能力を自由に使って適応することができやすい。しかし、実習であると、精神



保健福祉士としてどのように行動すればいいかという、自分が未知の行動様式を求められることと、それが評価されることにより、萎縮して本来の能力が生かせないということがある。こうしたことを踏まえて、実習前にボランティアで、利用者との関わりができたという成功体験ができると、実習生が自信も持つことになり、実習時に自信として生かされる。

こうした体験を踏まえて、次のことを明確化することが望ましい。まず、「私にとっての精神保健福祉士」とは何かなど、精神保健福祉士の資格取得の動機について言語化したい。次に「精神保健福祉士としての適性や資質」などについての自己洞察も深めておきたい。

## 5. 出身地での実習

当初、精神保健福祉援助実習は270時間（6週間）を8月の夏期休暇中から集中で実施していた。2年目から、実習生の負担も高いことを踏まえ、学内での実習事前指導を充実し、開講時期に配属実習を行う方式として、180時間（22.5日、4週間）の法定実習として、現在に至っている。

また、実習施設については、初年度は大学近郊の指定施設だけに限定していた。しかし、4年次の社会福祉援助技術現場実習2の応用実習による実習施設の開拓経験を踏まえて、2年目からは学生の自己開拓による実習施設での実習も認めることにした。

この2年目からの実習の変革によって、実習学生の九州・沖縄・山口など各県出身者が、出身地の精神保健福祉施設での実習により、実習施設または出身地での就職が現実となり、精神保健福祉施設や一般病院などにソーシャルワーカーとして就労という成果が上がっている。専門職養成としての本学科の目

標を達成していると言えよう。

出身地による実習は、実習指導者に後進育成という点で、より充実した実習指導となるだけでなく、実習生自身も、地元と言うことで、慣れ親しんだ環境での実習であり、その地域の特殊性も踏まえた実習となる。

精神保健福祉施設の就職採用においては、実習生の中からの採用率が極めて高く、実習が就職活動と言える状況がある。よって、実習中に、実習生の資質や素質が発揮できるような実習生支援が必要となることは言うまでもない。

## 5.2 実習生支援のシステム化

ここでは、実習生支援のシステム化として、大学の行事として行いながら、実習担当関係者の相互理解、情報交換などについて概観する。特に、実習報告会は、実習指導者も参加することで、実習生の実習成果を実習施設などに情報開示することでもあり、実習生の成長が見られる。

### 1. 実習事前指導における実習事前指導講師

まず実習事前指導の講師として、配属先の実習指導者を招聘する。

実習生が直に実習指導者の考えや仕事ぶりを理解し、精神保健福祉士についての具体的なイメージができやすくなる。実習指導者の話を聞いて、配属実習先を変える実習生、夏期休暇中に自己実習として行く実習生もあり、人と人が直接に会うことの意義の大きさが実感される。

### 2 精神保健福祉援助実習報告会

次に、精神保健福祉実習報告会を開催して、次年度以降の実習生候補者も実習指導者と交流できるようにする。配属実習からの問題と

して、実習生の教育がどのようなになっているかを問われる場合があるが、多様な実習生がいることを伝ええる機会となる。他の実習生の報告を聞くことで、実習指導にさらなる工夫をする実習指導者もいる。実習報告会では、実習生が利用者との実際のコミュニケーションを逐語記録に起こしたものを報告する課題を与えている。

### 3. 精神保健福祉実習連絡協議会

最後に精神保健福祉実習連絡協議会を開催して、実習指導者から、その年度の実習生の課題、実習指導上の課題などに話し合い、実習指導者と実習教員との連携が図れるようにしたい。これは、現在は社会福祉援助技術現場実習連絡協議会との共同で実施している。

### 6. おわりに

実習生は、慣れない環境のなかで、誰も自分を支援してくれないと思いこみ、目の前の悩みに心を奪われて、「自分は駄目だ」と悲観的になりやすい。

悩みだけでなく、失敗を乗り越えてこそ、専門職として一人前になってゆくものであり、「人生は山あり谷あり」という苦難を体験し成長する過程について、実習指導者や実習教員が自分の体験などを交えた話し合いをするだけでも、実習生は気分が楽になる。実習生は長期的な見方をもつことで、自分が悩みを抱えながら専門職として工夫しながら成長するという視座をえることで、苦難がある道も歩み出せるようになる。そのためにも、実習生支援のあり方を工夫することが、実習担当教員の役割だと思われる。

最後に、精神保健福祉援助演習が通年で1コマであり、1年間の演習では限界がある。社会福祉援助技術演習が通年2コマとなったように、ロールプレイなど実践的演習によっ

て学生が、実習中に対人援助職として十分機能できるように教育することは不可欠である。

### 謝辞

精神保健福祉援助実習は、1期生は後藤秀昭先生、2期生からは永田俊明先生との共同で行ってきた。さらに、佐藤林正学科長をはじめ社会福祉援助技術現場実習担当教員の諸先生方のご支援によって実習生が無事に実習を終えている。諸先生のご尽力に感謝申し上げます。

### 参考文献

- (1) 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会  
編集 精神保健福祉援助実習 へるす出版 1998
- (2) 岡田まり・柏女霊峰・深谷美枝・藤林慶子編  
ソーシャルワーク実習 有斐閣 2002
- (3) 福山和女・米本秀仁編著 社会福祉援助技術現場実習指導・現場実習 ミネルヴァ書房 2002
- (4) 神田橋條治著 精神科養生のコツ 岩崎学術出版社 1999
- (5) 日本精神保健福祉士協会監修 指導者のためのPSW実習指導Guide へるす出版 2002

## **Research on Support for Students in Psychiatric Social Work Field Practicum**

**Koichi MASUMITSU**

### **Abstract**

This article discusses the support for students taking the course in Psychiatric Social Work Practicum course. Generally, students have many issues and concerns during fieldwork period including fieldwork in psychiatric social work placement, national examination, job hunting, and preparation for graduation thesis. After clarifying the tasks and dilemma during field practicum, this article examines the safety-nets ? measures ? to help the students cope with their problems. First, it is important to empower students through consultation employing various means of communication such as portable phone and/or electronic mail. Second, volunteer experiences before fieldwork was found to be helpful for students to become familiar with mental hospitals or rehabilitation facilities as well as with patients. Finally, this article points out that it is crucial to systematize performance review meetings of students after fieldwork and consultation with field instructor, which can strengthen the relationship between the field instructor and field liaison in university. This structure involving a high degree of cooperation between the participating units will provide the students with much support required during the fieldwork.

**Key word** : Psychiatric Social Work Field Practicum, empowerment, student support